

エアハンドリングユニット(AHU)の2013年の出荷動向(日本冷凍空調工業会発表)をみると、1-9月までの合計台数は前年同期比17%減の1万1千29台。リーマン・ショックの影響が残る2010年の年間1万5千221台をホトムとし、11年、12年と年間1万7千台超に押し戻していたが、13年は再度下振れ感が色濃い。AHUはバブル経済を背景に80年後半から右肩上がりに推移しピークは91年の3万4千608台。その後、バブル崩壊と

—AHU、2013年は下振れ推移—

高付加価値機種に活路

もに需要が減少するも08年まで3万台超水準を維持した。しかし99年に3万台を大きく割り込むと徐々に縮小トレンドを描く。08年に2万台を切り09年はピーク時のほぼ半減、10年にはボトムの1万5千台水準にまでしぼんだ。こうした中、AHUメーカー各社は激しさが増す受注競争を勝ち抜くべく、普及機のコスト対策を講じる一方、省エネ性や快適性を二層追求した高付加価値機種の開発、訴求に活路を求め、向きが鮮明になってきた。

ニーズに応じた多様な提案

新晃工業

病院、データセンターなど需要別製品展開

床病室用ファンコイルユニット、データセンター向け「ハイブリッドエアハン」などを投入、製品ラインアップの拡充強化を図り、実績を着実に積み上げていった。

2013年5月に発売開始したコンパクト型空調機「AJEC型」は次世代空調機の新コンセプト「Smart AHU(スマートAHU)」に位置付けられる。スマートAHUは利用する人に対して常に快適な環境を提供し、建物に対しては省スペース化と保守・管理の容易化の実現を目指すというもの。2015年春に施行される「トップランナー基準」に対応したプレミアム効率(IE3)モーターを搭載。ファンの駆動方式にダイレクトドライブを採用し

空調機器総合メーカー、新晃工業(社長=武田昇三氏、本社=大阪市北区南森町1-4-5)は、幅広い市場各分野からのニーズに応え、2013年もコンパクト型空調機「AJEC型」、4

たことで省スペースを図った。同社従来機種と比べて設置床面積で約25%、容積で約20%の小型化を実現、総合エネルギー効率も最大で24%、平均16%向上させた。病院空調の分野では4

床病室用ファンコイルユニットを市場投入した。これは4床病室の天井中央部分に設置するもの。従来の機器では天井内のダクト工事やベッドごとの吹出口が必要だったのが、独自の誘引型吹出口形状を採用したことで部分負荷時の気流到達距離の最適制御を可能にし、ダクトレスでの4床個別制御を実現した。施工費を削減できるほか、DCモーターによる部分負荷時の効率化を図ったことで消費電力も削減できる。2012年に発売した外気処理機「クリンキユーブ」と並んで病院空調のニーズに応えた。近年、クラウドサービスの利用急増に伴い、目覚ましい伸びを見せているデータセンター向け空調として省エネシステムを組み合わせた「ハイブリッドエアハン」も2013年の注力商品。局所空調方式、プラグファンによる送風動力削減、冷媒自然循環によるフリークリングなどを組み込んだ省エネ型空調システム。同システムを採用した場合の年間消費電力削減率は東京で39%、札幌では50%に達し、年間平均気温の低い冷涼地域での削減効果が大きい。省エネ型データセンター構築の解決手段として提案を進めた。ニーズに応じた多様な提案を加速させた2013年。空調機器総合メーカーならではの新機軸の展開がこれからも期待される。